

令和4年5月31日（火）令和4年度第1回富山県成長戦略会議 議事要旨

<開催概要>

- 1 開催日時 令和4年5月31日（火）10：00～11：30
- 2 開催場所 富山県庁4階大会議室、オンライン
- 3 出席者（五十音順）

齋藤 滋	富山大学学長
高木 新平	株式会社ニューピーズ代表取締役社長
土肥 恵里奈	株式会社ママスキー代表
中尾 哲雄	富山経済同友会特別顧問
中村 利江	エムスリーソリューションズ株式会社代表取締役社長
藤井 宏一郎	マカイラ株式会社代表取締役CEO
藤野 英人	レオス・キャピタルワークス株式会社代表取締役会長兼社長
前田 大介	前田薬品工業株式会社代表取締役社長
藻谷 浩介	株式会社日本総合研究所主席研究員
吉田 守一	株式会社日本経済研究所サステナビリティ経営本部副本部長

<議事次第>

- 1 開会
- 2 挨拶
富山県知事 新田 八朗
- 3 議事
 - (1) 富山県成長戦略会議の令和4年度の検討事項等について
 - (2) 富山県成長戦略のKPI（成果指標）（案）について

1 開会

2 知事挨拶

昨年の2月に第1回目の成長戦略会議を開催し、それから毎回、自由闊達、突き抜けた議論を積み重ねていただいた。その後、この会議の議論に加え、6本のワーキンググループでも検討し、そして、できた成長戦略の案を持って15市町村を回るビジョンセッションを行い、そこで県民の皆様の見解も大いに取り入れさせていただいた。最終的にはパブリックコメントを経て、本年2月に富山県成長戦略として発表した。また、これに伴ってアクションプランも策定し、戦略の推進のために具体的な策を整理し、本年度の予算に盛り込めるものは盛り込んで、154の事業を今走らせている。

昨年3月には、成長戦略のビジョンである「幸せ人口1000万～ウェルビーイング先進地域、富山～」をより発信し、共有する仲間を増やそうということで、「しあわせる。富山」という一連のイベントを開催した。県内外から多くの方々に参加いただき、委員の皆様にも登壇いただくなど、大変協力をいただいた。そして、参加された方々、ゲストの皆さんそれぞれにその成果を発信いただき、また、お知り合いの方々に富山にお招きいただくといったことがどんどん広がっている。着実に一步一步「幸せ人口1000万」に向けて歩みを進めることができていると実感している。

本年度は、このビジョンを実際に進める実行の年にあたる。県ではウェルビーイング推進課という組織をつくったり、こども家庭室を設置したり、推進体制を整えている。また、市町村や企業との連携も大切であり、進めている。

本日は、成長戦略会議の今年度の検討方針の整理、そして、成長戦略を効果的で実効性あるものにしていくために、様々なKPIを設定したいと考えている。

これまでどおり自由闊達なご意見をよろしくお願ひしたい。

3 議事

(事務局から会議資料に基づき説明)

【三牧知事政策局長】

- ・今年度の進め方というところで、昨年度の会議の中でもP D C Aをなるべく早く回していくという指摘をいただいたが、今年の事業も始まったばかりであるため、ワーキンググループとキャッチボールしながら大きな方針をこの成長戦略会議で決めていただき、細かいアクションプランの方向性などはワーキングで深めていくという、去年と同じような形で考えたい。
- ・今説明したK P Iも、アクションプランに154事業あるが、それぞれ決めるというよりは、安宅委員からいただいたような、どういう状態に持っていくかというところを意識して、各部局で案として出させていただいている。
- ・役所の進め方なのでご意見をいただきにくいところもあると思うが、アドバイスや感想等をいただきたい。

【高木委員】

- ・全体の進め方の話で1つ思ったのは、ワーキンググループについて。
- ・考えた戦略に関して多様なバックグラウンドや専門性がある人たちから意見をもらうという意味では去年はよかったと思うが、今年はプロジェクトを実際に形にしていくことを考えると、ちょっとステークホルダーが多過ぎるなと思っている。
- ・ワーキングによって違うと思うが、まちづくりとかブランディングは、委員が15人、しかも結構いろんな人たちがいて、それを一々コンセンサスを取って進めていくのはすごく時間がかかってしまう。
- ・座長を中心に、前にワーキングにいらっしゃった方、またはそうじゃない方も含めてプロジェクトごとに組んで柔軟にやっていくような形で、ワーキンググループの形自体は去年のものから見直したほうが進みはいいと思う。
- ・実際、議論自体はワーキングで行ったが、検討すべき課題に関してどんどん進めたいと思うものは、必要な人にどんどん質問や協議をしていって、もう結構議論している部分もあるので、スピード感が求められる中で言うと、ワーキングの形自体を見直して、座長のほうでどんどん回していく格好でもいいのかなと思う。

【前田委員】

- ・ 6つの戦略の柱ごとのワーキンググループについて、4の新産業戦略、5のスタートアップ戦略、6の県庁オープン化戦略は個別で何とか進められたとして、1のウェルビーイング戦略、2のまちづくり戦略、3のブランディング戦略を各ワーキンググループに分けたことの無意味さというか、順番も含め、結局、まちづくりを考える話をしたときに、そもそもブランディングがちゃんとできていて、その中で恐らくウェルビーイングとまちづくりといったものがやっと初めて議論できるといったときに、ばらばらで議論するのはいかなものかというのは、去年の各ワーキンググループでも結果として出たと思っている。
- ・ これをまた繰り返してしまうと去年と同じことをまた起こしてしまうと思って、そこはちょっと危惧するところ。
- ・ この座組みはやる前に見直すというよりは、ブランディングができて、その後だよねというところにもう一回立ち返るべきかと思う。

【高木委員】

- ・ まちづくりとブランディングは、本当に前田さんがおっしゃるとおり、一緒にいいかなと思っている。
- ・ 議論としては、数年後、富山をどういうまちにしていきたいのかという理想を描いて、いろんな人を巻き込んでいって、関係人口を増やしながら富山の理想のイメージというものをつくりに行くということだと、ほぼ一緒だと思う。
- ・ ウェルビーイングは中村さんのご意見も伺いたいが、重なる部分もちろんありつつ、とはいえ、もうちょっと県内の方々の、特に女性のウェルビーイングが低いというところが始まりだったので、そこに完璧に重なるのかどうかはあるかなと思いつつ、まちづくりとブランディングは本当に一緒にしてもいいかなと思う。
- ・ ブランディングの方針をちゃんとまとめながら、まちづくりの種をちゃんとつくっていくということ動いていけるといいのではないかな。実際、メンバーも重複しているような人がワーキングでもすごく多かったので、それは同意見。

【中村委員】

- ・ ウェルビーイングのワーキンググループをやっているのは、いろんな方のご意見をいただけてすごくいいことも多かったが、レベルが違い過ぎたということ。
- ・ 今の富山県に必要なのは何かというと、高いレベルのことを言われてもできないし、今の富山県に求められるのはこの辺のレベルだよというところをちゃんと理解した上で決めなくてはいけないと思っている。
- ・ 去年は幅広く意見をいただくということをしたが、今年についてはやはり集中してやれるステークホルダーというのは少し減らして、富山県に根差してしっかり考えるというのはあると思う。
- ・ もう一つ、K P I のところで、特にウェルビーイングなんかは定量的に測れないものなので、アンケートを取るというのはすごくいいと思うが、アンケートを取るにしても、最初に、今の状態がどうであるかということをもとに把握して、そこからどこを目指したいのか、どういうふうに良くしたいのかということを考えて、期末に一度同じようなアンケートを取って改善したのかどうか、ちゃんとこの戦略会議が機能したのかどうかということを検証していくということも必要じゃないかと思う。
- ・ もう一步進むと、ウェルビーイングが逆に進んでいて、女性の有効活用等が進んでいる県との比較というところもしていけば、より明確になってくるのではないかと思う。

【藤井委員】

- ・ 全ワーキンググループを傍聴させていただいたが、皆さんおっしゃるとおり、まちづくりとブランディングはかなり重なるテーマが多い。
- ・ なおかつ、すごく具体的なことに関して具体的なアイデアを持っている方と、まず大きな抽象的な方向性について議論している方とがばらばらだったりして、いわゆる「船頭多くして船山に上る」という状況にあったのは、傍聴した立場からも思う。そこを整理して人数を減らすなり統合するなりというのは同じく賛成。
- ・ ただそのときに、検証可能性とか透明性とか責任の所在ということはきちんと確保しなくてはいけないと思う。要するに、少数の人たちが、自分たちがやりやすいようにやるためにほかの人たちに下りてもらおうというのはやはりよくなくて、何でこういうことをやっているのかだとか、その方向性に対して意見をいろんな人が意見を言う場というのはきちんと設けたほうがいい。

- ・それに関連して1点確認で、先ほどK P Iに関して、考え方や案として資料2を説明いただいたが、その考え方について、文書化する予定はあるか。例えば付加価値の上位10%を狙うとか、あるいはデジタル・ケイパビリティ・インデックスというものは何であつて、20.0というのが何を意味するのかとか、口頭で説明があつたが、検証可能性という意味では、なぜこれがK P Iなのかというのは資料として記載があつたほうが、いろいろな意味で外からの検証可能性に耐え得るK P Iを設定できるのではないかと思う。

【藻谷委員】

- ・分科会に全然出られていなくて、全くその点の発言権がないので黙っていたが、おっしゃっていることを聞いたら、本当にそういうことだろうと思った。
- ・この資料の中で2点、簡単なほうからいくと、まちづくり戦略の組織創出について、これは既に県内にある、官民というか民だが、井波のジソウラボみたいに、ここに書いてあるとおりの地域主導、共創で、まちづくりに取り組む組織があるわけで、既存のものは取りあえずそれで頑張ってもらい、新しく加えるというイメージなのか。または、県内に今までないようなレベルのものをつくるというイメージなのか。
- ・こういうのをつくるというイメージがないと、いかようにでも組織の解釈ができる。小さい、大きい、そのあたりのイメージ感を教えていただきたいというのが質問として1点。
- ・あと、資料1に関するコメントとして、富山県のウェルビーイングが低いということが仮にあるとすると、県民性で何でも悪く言ってしまう意識がある。一方、大して本当によくないのに何でもいいと言ってしまう県もあるが、その場合、いろんな問題が解決しない。富山県は非常にあらゆる指標でいいが、みんなが駄目だ、駄目だと言うから、ウェルビーイングが実際低いとすると、そういう主観的な要素をどう調整するのかというのは非常に興味がある。
- ・これは難しいから調査による把握としているのかなと思うが、非常に重要な点。要するに、洗脳してこれはいいのだと理解してもらおうというのでもいけないし、かといって、本当に今の県民がこれはいいと言うまでやろうとすると、多分何をやっても文句を言われ続ける可能性があるので、どう落とすのかというのは考えなくてはいけない。

【中尾座長】

- ・それについて、藻谷委員のご意見はないか。

【藻谷委員】

- ・1個目については、事務局のイメージとして今まであるようなものをつくりたいのか、全然違うものをつくりたいのかというのは、ちゃんと決めてから出さないと、イメージ感が合わず創出できたかどうかのK P Iが立たない。
- ・もともといろいろとそういう取組みはほかの県より多い。例えばパッシブタウンだってそうだと思う。官民共創による地域づくりの取組みで、そういう非常にすごいものまであるわけで、その上でどういうイメージなのかということ、県庁側としてどう思っているかということはずいぶん聞いてみたい。その設定をちゃんとしておけば、同じようにすばらしいものはまだ出てくると思う。
- ・あと、ウェルビーイングに関して言うと、1つのやり方として、どうしても文句は言われるが、やはり群を抜いて残念ながらできていないところに注力するという方法はある。
- ・例えば女の人が出ていくということがあるわけで、それに対しては若い女の人のウェルビーイングという点だけに絞って、実際、彼女たちが、どこがよくないと思っているから出ていくかということをしちんと突いた指標にするとか、非常に相互の監視が厳しくてあんなに言われると思っている若い女性の割合が多いとか、絞った形でK P Iをつくと達成度が少し分かりやすくなるのではないか。
- ・つまり、全県民のウェルビーイングと言ってしまうと、ぼけるのではないか。一番ウェルビーイングを気にしなきゃいけないのが、この会議では県出身の若い女性で、かつ、割に能力が高い、学歴が高い人が出ていってしまうということなので、それについての意識という点に絞った指標を1つ置いておくべきだと思う。

【吉田委員】

- ・今、まちづくりのところで、確かに昨年度と同じやり方を踏襲するのであれば、私もまちづくりとブランディングというものはちょっと見直したほうがいいという意見には賛成。
- ・藻谷さんがおっしゃった、市町村とも連携しながら地域主導、官民共創でまちづくりに取り組む組織の創出、5つの組織というのは、私もこれは質問したいと思ったところ。

- ・ゼロからつくることに限定されるイメージなのか、既にある枠組みを生かしたり、解体したりしてつくり出すことも含めているのかというところは、K P Iを設定するからには明らかにしていきたい。
- ・ワーキンググループの議論のときは、地域の課題に向き合って、官と民が共に新たな価値を創造することを専門的にサポートする中間支援組織みたいなものが必要じゃないかということだったので、実際に現場でやっている人をさらにサポートするような組織であるとか、その辺も含めて自由にデザインしていければよい。
- ・ワーキンググループなのか、それをやりたいと思っている人たちと一緒になのか分からないが、議論していけばいいと思う。

【藻谷委員】

- ・中間支援組織の話は、それはどちらなのか分かるようにする、あるいは数を分けたほうがいいのかもわからない。

【土肥委員】

- ・ウェルビーイング戦略のワーキンググループのメンバーとして、今のK P Iの資料を見たが、ウェルビーイングのところ以外は理解できるが、ウェルビーイングのところだけ、いまいち分からない。

【藻谷委員】

- ・全く同じ感想。

【土肥委員】

- ・結局、戦略の2から6をやれば1につながってくると考えるべきなのか。
- ・ワーキンググループでは、女性のウェルビーイングが低いという話があり、女性のウェルビーイングを上げるためにはどうしようかみたいな話が議論されていたが、今のこの戦略1の文言内にはそういう用語がなく、調査結果を見ようという印象で戦略が分からない。
- ・基本的には、富山の人「これってどういうこと？」と聞いたときに答えられるものにしたほうがいいのかと思うが、まずは調査の結果を見ようみたいな方向性では目標で

はない感じがする。

- ・最終的に目指すところ、5年後、10年後とかはあるかもしれないが、そのファーストアクションとして、例えば、県外に出ていってしまう若い女性の問題を挙げるならば、まずはそれを掲げて、かみ砕いたほうがいいのかなという感じはする。
- ・今の感じでワーキンググループをしようと言われても、何を議論していいか正直分からないと感じているので、その辺の細かい説明が欲しいというか、ディスカッションできたらうれしい。

【中村委員】

- ・補足で、ワーキンググループの中で結構具体的な議論まで出てきていて、例えばファミリーサポートという制度があって、子供を近所の人に見てもらえるというのはすごくいいという話になっている。
- ・ただそれが、一部の人は使っているが、知っている人が非常に少ないことや、導入されていないエリアもあるので、これが今せつかく制度としてあるのだったら、もっと知らせたほうがいいということや、富山県全体で使ってもらったらすごく良いというふうにもう答えが見えているものもある。
- ・それを具体的にみんなが使えるようにしてほしいという項目を大きく入れたりしたのだけど、そういうのが今回の資料ではなくなっているということにちょっと違和感を感じていた。
- ・これはまたワーキンググループの中で言えばいいのかなと思いつつ、なかなかそうは言っても、市町村を巻き込んでやるということではできないから、そういう表現をされているのか。県としても難しいところはあると思うが、せつかく去年のワーキンググループの中で具体案が幾つも出ているものを全部一旦消去されてしまうと、今までの議論がちょっともったいなかったなという感じはしている。

【三牧知事政策局長】

- ・確かにKPIとどうつながるかというのはあるが、そういう意味では、アクションプランでファミリーサポートを使いやすくするイメージアップ事業というのは盛り込まれてはいる。
- ・ウェルビーイングの調査を今年行うが、当然県内の女性にも聞くし、県外に出ていった

女性にもアンケートをかけることを検討しているので、ここのウェルビーイングも一つだけの指標にするのか、全体の指標と特に議論の中心だった若い女性の指標を別途立てるかというのは、対応できると思っている。

【牧山ウェルビーイング推進課長】

- ・今ほど御指摘いただいたウェルビーイングの指標については、全く新しい取組みということで、県もいろいろ今勉強中のところ。
- ・先ほど中村委員からもお話があったとおり、非常に主観的な指標ということで、捉え方というのは非常に難しいかなとも考えており、調査行為自体が県民の方々のマインドにも影響を与えるような面もあるかと思っている。そのあたり、例えば調査の項目の設定等いろいろ工夫もしていきたい。
- ・藻谷委員からも御指摘いただいたとおり、非常に今の表現の仕方は茫洋としていて分かりにくい点はあるかと思うが、実際、昨年度御議論いただいたウェルビーイングの中核に女性の意識を据えるというのは県も意識をしている。
- ・例えば、今後調査する中で、広く県民の皆さんを対象にやりたいとは思っているが、その中でも若い方、特に女性の意識の部分を抽出してK P Iの中に分かりやすいものとして据えるというのは、1つ方法としてあろうかと思っている。
- ・その一方で、やはり県民全体のウェルビーイングというものも考えていきたいと思っており、持続的に向上していくというイメージとして、県として考えているのは、調査時に現時点での幸せ度合いというものを聞いた上で、例えば「将来1年後とか3年後、どんなふうになっていると思われますか」というのを、その時点での将来の希望というような方向性でお聞きするといったことも、時系列の中で御自身のウェルビーイングのありようというものを考えていただくことも含めて聞いてみることも、1つ方法としてはありなのではないかということでこのような書き方をしている。
- ・先ほど局長が申しあげたとおり、個別の設定方法なり、どういったデータをK P Iとしてお示ししていくかというのは今後検討の余地もあると思うので、またご意見を賜りたい。

【三牧知事政策局長】

- ・補足で、今回、参考資料2として最近の取組みを紹介させていただいているが、2枚目

のとおり、新田知事からもいろんなところでウェルビーイングの取組みについて発信している。

- ・富山県のウェルビーイングの取組みの特徴としては、若い女性のウェルビーイング向上を重視するという。あと、こういうことをしたらウェルビーイングが上がるということを取組みにつなげていくような指標設定をしていきたいと思っている。
- ・県から事業者や県民の距離と比較して、やはり市町村のほうが近いので、県の立場として、市町村のサポートをしっかりとしていくことでウェルビーイングを高めていく。官民連携や共助、そしてやはり民間の力を借りて、より細かく県民のニーズ、事業者のニーズに対応していく。今、県の仮説としてそうした方針も打ち出しているの、まさに今みたいな考え方をこの指標、KPIの設定でも盛り込んでいければと考えている。

【前田委員】

- ・今の話の中で、県民にどういう指標でアンケートを取っていくのかという話もされたが、そもそも成長戦略のビジョンが、富山県が人口減少していく中で、関係人口をつくって1,000万人にしようというものなので、対象は富山に関係性のある人、1,000万人がウェルビーイングかどうかということが指標であるべきではないかと若干違和感を感じた。
- ・県民の100万人も確かに大事だが、富山に関わる1,000万人が幸せかどうかという非常に大事どころがちょっと抜け落ちている気がする。
- ・ブランディングの中には関係人口1,000万人と書いてあって、ビジョンには「幸せ人口1000万」と書いてあるので、これは多分ニアリーイコールで、「富山に関係する人は全員幸せにしよう。1,000万人それをつくろう」と。多分それがそもそもの全体的なウェルビーイング戦略だと思う。
- ・それを、あんまりウェルビーイングというのが県民に馴染みがないからということで、高木さんが「しあわせる。」、積極的に自分から幸せになるのだという言葉のワーディングとかブランディングをしてくれた。ここも1回ちゃんと立ち返った議論をすべきかと思う。
- ・そうすると、ウェルビーイング戦略はもう概ね概論はできていて、あとはターゲットをどこにするかという話をしていたほうが、ステークホルダーを小さく絞ったときに議論しやすく、総花的な話にならないと思う。

【藤井委員】

- ・事務局から先ほどの私の質問についてまだお答えいただけていないので確認させていただきたい。
- ・K P Iを見ても、ウェルビーイングのところは何のことを言っているのか分からないというこの問題は、昨年のアクションプランが出てきたときの資料の作り方の問題と同じことが繰り返されている気がする。
- ・要するに、最終アウトプットの上澄みだけが抽象的に出てきていて、その背景となる考え方が一切書かれていないから、何でこういうものが出てきたのか分からない。
- ・行間を読もうにも行間が広過ぎて、1ページだけに収められると読む行間すらないので、全然分からないということが起きているのだと思う。
- ・だからこそ、昨年のワーキンググループの報告書を取りまとめたときには、単なるアクションプランだけじゃなくて、その前に背景となる考え方というのを書いて、さらに今後課題にすべき継続的検討事項というのをある程度言葉を尽くして書いた。
- ・だから、このK P Iも、冒頭申し上げたとおり、今回の会議の資料としてはこの一枚紙だけれども、何でこのK P Iをどういう考え方の下に設定したのかというのは、きちんと言語化して検証可能な資料として残すのですよねというのが私の質問。

【島田課長】

- ・今ほどいただいたご意見で、K P Iのところの説明が必要なところ、根拠や考え方の記載が必要なところについては、いま一度整理して、記載したもので改めてお示ししたいと考えている。

【高木委員】

- ・整理すると、「幸せ人口1000万」というビジョンは、ほぼイコール戦略だと思う。
- ・多分そこにある要素は、関係人口を1,000万にすることと、ウェルビーイングを向上させるということと、それを通じて経済成長させるというようなことなのかなと思っている。
- ・今年、実行が大事だと言ったときに、この6つは戦略という言葉だけど実質は戦術みたいな話だと思っている。
- ・多分スタートアップとかが何をするのか分かりやすいのって、ほぼ何をするかというの

がとても具体的だからだと思う。

- ・ウェルビーイングだけまだ戦略レイヤーというか、その手前レイヤーでふわっとした言葉が並んでいたり、多分何をしたいかよく分からなかったり、ブランディングも関係人口1,000万という全体で達成することをここにぼんと置かれているので、大きいなどという感じがある。
- ・なので、ウェルビーイングを向上させる、関係人口を1,000万人にする、それを通じて経済成長させるというところは、全体を通じて多分普遍というか共通しているものだと思う。
- ・その中で、それらを実現するためにすごく注力して今年度以降力を入れてやらなきゃいけないところを、6つの領域で明確にして、ここの課題をこういうふうに変えていくのだという具体的記述にするほうが、多分ワーキングは機能すると思う。

【吉田委員】

- ・K P Iについて、各論で恐縮だが、先ほどの高木さんのご意見の最後のほうに経済を成長させるという話があった。
- ・これは大事なポイントだと思うが、その要の1つである新成長戦略のK P Iを見ると、県民1人当たりの県内総生産を年2%増加させるとある。
- ・これ自体はそういうものなのかなと思ったりするが、県民経済計算は2022年5月時点でまだ2019年度が最新のものであって、2、3年ぐらい遅れるような統計だと思っており、これは一次統計のデータ収集や加工に時間がかかるという構造的な原因によるもの。
- ・だから、統計の数値が良くなっても悪くなっても、新たな製品・サービス・企業・市場の創出によるものかどうかよく分からないので、これはマネジメントできるのか。先ほどの言語化していただくというところの中で、そうした妥当性検証も併せていただけるとありがたい。

【南里地方創生局長】

- ・組織を5つ作るお話について質問をいただいた。今までの行政のやり方でいえば、こういう補助金を使って何事業を支援するといったことが従来型の行政のK P Iだと思うが、成長戦略のK P Iではいろんな主体と連携しながらまちづくりに取り組む組織をつくりたいということで、5つという数値を設定させていただいている案となっている。

- ・御指摘いただいたように、ジソウラボや朝日町のみらいまちラボなど、すごく活躍いただいております、これは非常にレベルの高い大きな取組みをしていただいているところだと思っています。
- ・こういった組織の取組みが県内いろんなところで起こっていくといいなという気持ちと支援していききたいなという気持ちでいる。
- ・それから、先ほどお話にもあった行政でもなく、純粋な民間でもなく、その中間で両方の気持ちを分かって支援していくような中間支援組織、これが移住者にとって非常にうまくワークしている例も見てきた。
- ・そういったものを含めて、組織を5つ育てていくというのは非常に大変なことだと思うが、何とかできないかという気持ちで、この5組織の中に幅広いものをイメージしているが、支援していききたい、伴走していききたいというイメージでのKPIとなっている。

【藻谷委員】

- ・さらに新たに加えるというイメージでお考えだということで理解した。

【高木委員】

- ・まちづくりとブランディングが重なっているという話があったと思うが、中間組織が必要だというのはブランディングでも出ていて、検討すべき課題のところで書いている。
- ・ある種ジソウラボとかみらいまちラボみたいな既にボトムアップで生まれているようなものを、県が同じようなスキームで他の自治体、市町村につくっていくというのは、やったほうがいいと思う。
- ・同じ中身になっていくからますます一緒にいいのかなと思ったが、5と言わず15市町村全部やってほしいと思っている。
- ・こういうのは中から議論できないと思う。この成長戦略ビジョンをつくったときも、新田さんが全市町村を回ると言っていて、回ってくださったと思うが、多分、「は？」みたいな感じだったと思うが、実際全部回ったから意味があったと思っている。
- ・これは5と言ったときにどういう基準でどう選ぶのかというよりは、県なのだから全部の市町村にそういうものを用意したほうが、役割は違っていいと思う。せっかくもう真似するモデルがあるので、それは15市町村やると決め切ったほうがいいのかなと思った。

【三牧知事政策局長】

- ・既存のものも含めて15の市町村につくるというご意見か。

【高木委員】

- ・既存のものも含めて、全市町村にそういう組織がある状態をつくるということ。

【南里地方創生局長】

- ・確かにどこでもそういう動きがあるというのはすばらしいなと思う。あとは、この期間の5年間というところでどこまで全部一気に行けるかどうかというところの兼ね合いだと思うので、また相談したいと思う。

【高木委員】

- ・大丈夫、5年もあればできる。5年もあってできなかつたら、逆にどうするのだという感じがする。

【新田知事】

- ・ビジョンセッションを15か所回って、そのまま、さらに発展して自主的にビジョンセッションみたいなのをやっているのが、魚津とか射水。ただ、残念ながら全部にはそれになっていないので、このあたりをどうこれからフォローしていこうかということ。

【高木委員】

- ・まさに、去年の成長戦略会議でポートランドを参照していたと思うが、ポートランドって、住民の意見をどんどん聞いていくのがブロックごとにNPOがあって、それをポートランド開発局みたいなのがすくい上げて、まちづくりに落としていっている。
- ・多分今は、こういう富山県にしたいという声があっても、それをうまくすくい上げて、市とか県とうまくつないでいったり、動きにしていくハブがないのだと思う。
- ・だから意見を言って終わりという感じがする。それって住民の熱量のみに依存していて、盛り上がっているうちはいいが、多分形がなかなか続かない。
- ・15市町村に組織があることで、意見をすくい上げていって、少しずつでもあなたの言っ

たことが形になりましたよということが出来る。

- ・ポートランドは実際その自己実現感というか自己効力感が住民にあるから、どんどん意見を言うというサイクルが生まれている。
- ・なので、それがあって、ビジョンセッションのような取組みがちゃんと形になって、政策に落ちていったり、町に反映されるというプロセスをやっていると、すごい意味のある、去年の動きがちゃんと回収されていくような動きになっていくのかなと思っているので、そこをうまくつなげたい。

【吉田委員】

- ・今の話で、15市町村をカバーするというのは私も賛成だが、より広域的な視点でフォローする組織も必要。
- ・組織のデザインが同質なものが15並ぶというよりは、その15でそれぞれ共通化したほうがいいものについて、別途統一的なものでサポートするとか、いろいろと議論ができると思っており、そういうのを皆さんと早くしたい。

【藤野委員】

- ・今の件で、みらいまちラボは私が主宰している朝日町を中心とした勉強会なのだけでも、それをやりつつ、富山県という地域の中での様々な取組みをしながら非常に感じることは、もともと呉東、呉西の違いがあるという話があったのだが、それ以上に近隣間の中で交流がないということ。
- ・例えば朝日町と入善町は隣町だけど、何となくそれぞれのいろんな歴史的な背景もあって、行政があまりそれぞれコミュニケーションしていないとか、好きじゃないとか、コミュニティの分断があるというのを非常に感じている。
- ・いろんな県があって、全部の県を知っているわけじゃないが、富山県は他県に比べると意外に県内移動が少ないなと思っており、県内の中でコミュニケーションする機会がないというのはすごく感じている。
- ・何が幸せかを考えるときに、県の幸せを考える場合、県の人たちの力を活性化するという面で見れば混ぜなきゃいけないと思っている。
- ・それぞれの地域の中に、この数年間で自発的に何かしようという若手や、シニアも含めて出ていて、一部つながっているけど切れているみたいなどころがあるから、15市町村

でそういうものができて、その人たちが今度は横の連絡で、その地域の中でコミュニティーをつくっていき、横に動いていくことによって、混ぜると結果的に議論が創発されたり、そこで新たな取組が出てきたりというところがあるので、県内を混ぜるという視点はあってもいい。

- ・15の組織をばらばらにつくるというよりは、それは混ぜるための1つの仕掛けであるというふうになるといいと、高木さんの話を聞いて思った。

【高木委員】

- ・とてもそれに賛成で、なので県がやる意味があると思う。
- ・県の若手職員で力が余っている人が多分たくさんいると思う。もっとやりたいのだけど、なかなかやる機会がないとか。
- ・地元のそういう組織に派遣して行って、横の連携でつながっている県庁職員がそこで混ぜる機会をつくっていったりすると、お互いの課題を共有したり、こうやったら解決するのだとか、ここを連携して一緒に観光やろうよとか、そういう動きが多分もっと生まれてくるはず。
- ・県がそういうことをやっていくことで、繋げながらも各市町村をエンパワーする役割を担えると、すごく理想的かなと思う。

【藻谷委員】

- ・私も県庁職員が参加して繋ぐというのは、すごく現実的だと思う。
- ・当事者で没入している人は、なかなか連携といっても会議で座っているだけのことが多くなる。
- ・先ほどおっしゃったように、一つ一つが独立じゃなく、1%でもいいので、県庁職員がそういうのに参加して、KPIの評価のときにそういう職員の存在を評価としてあったねと言って足すというのは重要ではないか。

【吉田委員】

- ・昨年度のワーキングのときも、おぼろげながらそういったイメージというのは皆さん持っていたのではないかと思っている
- ・県内を混ぜるという話と、県外と県内を混ぜるというのを両方やっていけばいいのかな

と感じた。

【三牧知事政策局長】

- ・ 県庁オープン化戦略のところでもやはり越境人材、いろんな方と関わってプロジェクトを伴走支援していくような人材をつくっていくという話もある。
- ・ K P Iに入れるのかどうかというのはあるが、先ほどの県庁職員も入ってという話は、昨年度もワーキングで高木さんからいただいている課題だと思うので、そこはしっかり考えたい。

【藤野委員】

- ・ 朝日町でみらいまちラボをつくったときに重要な考え方として、「朝日町をよくするところ、大事だけど大事じゃない」ということを言っている。
- ・ それは何かというと、例えば、どこの地域も自分たちの町をよくしたいと思っっているに違いないわけで。それはそのとおりなのだけれども、でも、それじゃ人が集まらない。
- ・ 「山形の何とか町をよくしたい」と言ったって、「頑張っってね」という話になって皆さんに響かない。それと同じで、「朝日町がよくなりたいたい」と言ったって、逆に富山の他の市町村からすると、「頑張っってね」という、多分その話だけ。
- ・ コンセプトとして大事なのは、朝日町から富山県をよくする。朝日町から日本をよくするということ、そうすると来る意味が出てくる。
- ・ 閉じないで、自分たちだけのことを考えないで、広く他地域のことも考えていくというふうにすると、朝日町以外の人がある。東京だったり北海道だったり県外の人も集まってくる、混ざるといことが起きているので、やはり閉じないということが非常に重要だと思う。
- ・ 今回の取組で非常にいいなと思ったのは、「しあわせる。」や「幸せ人口1000万」というところのビジョンの高さ。これらはすごく大きくて、巻き込もうということなので、コンセプトとしてすごく重要になってくると思っている。
- ・ 実際にこの1年間ぐらいの取組みの中で、他県のところで話をすると、割とほかの県の人たちが、今、富山県を見始めていて、「富山県は何か変なことをしているね」「何かざわざわしているね」というところが結構評判。
- ・ 富山のことを聞かせてくれとか、どうなっているのかというところを、今、各県ではそ

ういう話が出てきているので、もう話もあるかもしれないが、多分これから視察とかがこの1年間ぐらいで結構増えるのではないかと思う。

- ・これはとてもいい効果で、やはり全都道府県の中で富山県がそういうふうになっているかに広い視点の中で巻き込んでいくのかというところ、閉じないで巻き込むというところを大きなコンセプトにしていると思うので、それを貫いていただきたい。

【藤井委員】

- ・今、県内だけでなく県外も混ぜるという話とか、県庁だけじゃなくて各市町村にも人が出ていくという話をされたが、これは県庁オープン化戦略のところにも関係すると思う。
- ・このK P I が今はジョブチャレンジ制度や庁内複業制度を活用ということで、あくまでも庁内で人がぐるぐる回るということのように読めるが、越境人材と言っているのなら、民間企業に出るだとか、市町村や県庁の外との交流というのもK P I にしないのかという話は、このK P I の資料を作る段階で事務局とはお話しさせていただいていた。今後そこも含めてこの紙を書き直すかというところは1つ論点になると思う。
- ・加えて言うと、まさにそういう議論が背景にあつてこういう書き方に今はなっている。あるいは、こういう議論をしてこういうふうに変えたということが、検証可能になっていることが重要。
- ・何で検証可能かということ、今後の県民の皆様が資料を読んだときに、ちゃんと分かることが重要だと思っている。そうじゃないと有識者委員が勝手に言っていることになってしまう。
- ・後から読んでも分かるように、何でこういう思考プロセスに至ったのか。行政がそれをやると面倒くさいし、一々言質を取られるので、どうにでも動けるように最初はアウトプットだけ数行で書きたがるので普通はやらないが、そこをちゃんと全部オープンにして、政策形成過程の思考プロセスを残すということが、本当の意味での県庁オープン化なのではないかと私は思う。

【高木委員】

- ・ウェルビーイング戦略は、最初に藻谷さんの問題提起からあったような、20～30代の女性の流出率が高かったり、ウェルビーイングが低いのではないかとこのところにフォー

カスするぐらいのほうが、議論の焦点がしっかりするし、いいのかなと思う。

- ・まちづくりに関しては、団体を全市町村につくってもらいたいと思っているが、それを県内外含めて混ぜていくところをちゃんと団体をつくってやっていくことなのかなと。
- ・ブランディングに関して、仮にまちづくりと一緒にして、その取組みにしてしまうというのもありだが、もし分けるとするなら、もう少し世界を見たいなというのは思っている。
- ・一応ここに「世界的に評価され」と入っているが、もうコロナが落ち着いてきているので、インバウンドは確実に戻ると思う。そう考えたときに、観光白書とかを見ていると、富山は今、海外だと実はアジアからの観光客がすごく多いが、そこに向けて戦略的に手を打てていない。飛行機も止まっているし、言語対応も全然できていないし、コンテンツもなかったりする。その辺は本気でやっていくとか、そういう世界から評価されるようなスポットをちゃんとつくるといえるのは必要なのかなと思う。
- ・関係人口は決して国内でつくるだけではないと思うので、そういう一定絞り切って、ワーキングで実際にやっていけるといい。
- ・言語を超えたような食とか自然体験をやはり海外の人は日本に求めていると思う。ちゃんとできれば富山はポテンシャルや地の利もあると思うので、やりたいと思った。
- ・新産業とかスタートアップとか県庁オープン化はちょっと分からないが、それぐらい絞れるといいなと思った。

【前田委員】

- ・今のところに少し紐づけて、ビジョンセッションがあつて各15市町村があつた後、魚津がまだ結構頑張つてやっていたらいい。射水市とあと、立山町もいつかLINE上も含めて続いたが、ちょっとずつシュリンクしていった。
- ・各市町村、どうしてすごく盛り上がっているところと縮んでいったところがあるのか、いろんな友達に聞いてみると、やはり最終的にはいろいろ集まった人が好きなことを言ったり、自慢し合ったり、問題を共有したりするのだけど、最後、この出口はどこかといったところに行き詰まる。そこに対して一定の予算があつたり何らかの支援がないと駄目なのだけど、誰にこの声を届けたらいいのかというのが結局分からないまま終わっているというのが1パターン。
- ・もう一つは、地域に圧倒的なリーダーみたいな人がいればいいが、やはりいなくて空中

分解しているパターン。大きく2つかなと思っている。そこにさっき言った中間組織みたいな、ファシリテーターみたいな人がいるとすごくいいと思う。

- それと、昨日、ヤマガタデザインの山中さんが富山に来てくれて、いろいろ話をして、トヤマズカンというのもやらせてもらっている。今、ショウナイズカンがチイキズカン連盟というのをつくって、トヤマズカンをはじめ、もう40、50に広げようとしている。それを広げるときに、ヤマガタデザインでは、3人ぐらいのチームをつくって、各地域にどういう問題があってどういう課題があってということと、K P Iを持ち出して「あの地域は走っていますよ。皆さん頑張ってください」と促してくれる事務局がいる。
- つまり、共創というよりは切磋琢磨する競争原理をある程度市町村の中で緩くかき立てることが必要なということと、単なる奪い合いじゃなくて、伴走してあげる事務局的な人、いわゆる中間体の組織がいて、各地域、各住民が、幸せ人口、関係人口1,000万人をつくる当事者になっているのだという意識を持つことが一番大事。
- そうすると、高木さんがおっしゃったとおり、各地域15地域につくるべきで、かつ、それがちゃんといい競争を生み出してあげることと、県か何か分からないが、伴走してあげる中間組織があるといい。
- それはヤマガタデザインがチイキズカン連盟というのをつくってうまくやっていて、彼らはそれを日本でやっているわけだから、県内だったらできると思う。
- 僕のアイデアでは、まちづくりの5組織というところをもうちょっと拡張して考えるなら、それはやろうとしている民間を支えるでもいいし、官民一体となってもいいと思う。その結果、ウェルビーイングをつくる当事者が増えることになると思う。

【吉田委員】

- 確認だが、今回K P Iについては5年後ということでもいいのか、それとも、足元の取り組みの方針みたいな話なのかということところは、途中から分からなくなったところもあるので、どこかでまた整理されるといいと思う。
- あと、今回K P Iの議論について、数値の良し悪しや妥当性とかそういった話もさることながら、前提として、6つの戦略についてそれぞれに対応する県庁内の推進体制が今現在どうなっているのか、どの部署がどういう実施責任を負うのかというのが実はよく分かっていない。
- 実際K P Iを担いで責任を負うようなところについては、これはイノベーションの取組

みで現在の延長線上にない話なので、必要なリソースをしっかりと重点的に配分してもらおうといったこともセットでないと、K P I だけ議論していても本当に実現するのかなど不安になるため、よろしくお願ひしたい。

【三牧知事政策局長】

- ・そういう意味では資料に書くべきだったと思うが、6つの戦略ごとに担当部署をしっかりと決めている。
- ・こちらも報告書に責任部局をちゃんと決めるということがあったので、ウェルビーイング戦略は先ほど課長が説明したが、ウェルビーイング推進課が知事政策局にあり、そこがメインで担当している。まちづくり戦略は、地方創生局の地方創生・移住交流課が取りまとめとして担当している。ブランディング戦略についても、先ほど申し上げたウェルビーイング推進課に関係人口をつくる担当が創設されたので、そこが担当しており、新産業戦略については商工労働部の商工企画課が取りまとめ、スタートアップ戦略については知事政策局の創業・ベンチャー課、県庁オープン化戦略については経営管理部の公民連携・行政改革課というのが新しくでき、そちらが担当になっている。
- ・K P I は5年後というところで、こちらは県の総合計画という大きな計画を補完する立ち位置なので、目標年度も合わせた形で5年後を設定している。

【齋藤委員】

- ・ウェルビーイングのことだが、十数年前にデンマークに行って、デンマークの社会保障のことを国家のナンバー2の方に来ていただいてお話ししてもらったことがあった。
- ・あのときデンマークは、いわゆる介護保険制度を何歳からするかを決めるため、国民投票をした。その結果、68歳からするというので、国民投票で支持を受けて、その分、各人に支給する保障額は高くなった。
- ・その後、行政がしたのは、各企業に働きかけて定年を65歳に上げてくれとお願いし、国民には、とにかく3年間だけは生活できるような貯金をしてくれと、でも68歳になると皆さん裕福に生活できるから、安心して老後を迎えてくれというふうにした。
- ・そういった保障を行うことで北欧諸国のウェルビーイング指数はすごく高い。恐らく老後のことをあまり心配されていないからだと思う。間接税は二十数%と日本とは比べものにならないけど、それでも非常に皆さん生き生きとしており、私自身、老人の方と女

性の方がすごく生き生きしているなと思った。

- ・私自身は労働政策というのは全く素人だが、お年寄りの方に安心して富山県で過ごしていただくと思うと、やはり再雇用システムの充実というか、ある程度企業に働きかけて65歳定年にする。その後、70歳ぐらいから5年間は何とかしてくださいと。そういう形のこと。富山県は、65歳まで働いている方が全国でもトップクラスなので、富山県の方針として65歳定年とすれば、全国から中・高年の方が富山県に移住する可能性がある。
- ・2番目は、最近言われているリカレント教育。リカレント教育もして、きっちりと再雇用にも耐え得るような形での対応をしていただけたということ。このシステムも整えるべきだ。
- ・3番目は、社会保障制度の充実。65歳定年で65歳以降は富山県でそういうシステムを採るのだという形にして、きっちり安心して老後を送ってくださいという施策が、1つの売りになるのかなと思っている。そうすると、優秀なお年寄りが県内を目指して来ていただけるということも十分あるのかなと思う。
- ・4番目は、私は産婦人科医なので、女性の産後ケアのことについて、森前市長にお願いして産後ケアハウスをつくってもらった。これは全国的に注目されているが、富山市に住んでいる方はあまり御存知ない。東京都に産後ケアはあるが、大体1泊5万円から8万円する。富山では6,000円だったか、7,000円だったか、そのぐらいで行ける。だから、そういうことももうちょっとPRしていただきたい。
- ・あと、今回、藤井市長に、産後の育児中のケアの支援もしていただいた。恐らくこれは全国でも初めてだと思う。産後は育児のことが大変なので、家事のこととか家の掃除とかできなくなって家中散らかり放題になるが、そんなときにちょっと来ていただいてお手伝いいただくという形で、そういうシステムもできた。
- ・女性の流出ということを言われたが、こういうシステムを富山県は採っているということを知ると、富山で育児、子育てをして、育てていこうという形になると思うので、そここのところも含めてPR不足かなと思う。ぜひPRしていただきたい。
- ・それともう一つ、これは、今、学内の方、研究者にお願いしているのだが、ウェルビーイング指数ってなかなか難しいので、NECに言ったら、顔認証システムがあって、マスクをしていても顔が笑顔かどうか分かって言ってくれた。
- ・そこで、いろんな形で定点モニター等をつけて、富山に来られる方、それから富山を出ていかれる方なんかの来る前と出る間の笑顔。そういった幸福度がどれだけ上がってい

るのかとか、町の、例えばファボーレや大和の前に定点カメラを置いて、皆さん、お買物に来るときの笑顔が随分上がってきていますよとか、そういうところでウェルビーイング指数を見てもいいのかなと思って、今研究者に言って、それができるかどうか確認してもらっている。

- ・もしできたら、それをうまく利用してもらえると、県民のウェルビーイング指数、これはアンケートを取ってやるのは大変だが、まちなかの人たちの流動、どれだけの人が来ているのか、それから表情が明るくなっているのかどうかということも非常に参考になるのかなと思うが、そういったことも含めて評価していただければと思う。
- ・ちょっと雑駁な意見だが、いわゆる再雇用システムということなんかも県で検討しているかどうかを教えてください。
- ・やはり今、高齢化社会になってきて、皆さん老後の生活を非常に心配されていると思う。でも、その中で定年を少し延長したり、県を挙げてこういったことに取り組んでいるとか、社会保障制度も十分充実しているということを言えば、かなりこれはPRになるかと思うが、そのあたりいかがか。

【新田知事】

- ・2つあって、テンポラリーな、ちょっと時間があるから働きたいという方々には、シルバー人材センターという組織で対応している。それから、引き続きフルタイムでまだ働く意欲も体力も気力もあるという方向けの仕事のマッチングの組織もつくっている。再雇用については、一応組織立てとしてはそういうふうに対応している。

【齋藤委員】

- ・県の産業界の御理解とそういった方針ということも非常に重要だと思っている。
- ・デンマークのことも、今、国がこうしろと一方的に決めたのではないが、国が企業にお願いして、当時60歳が定年だったが、65歳まで定年を延長してもらった。その分サラリーは若干下がるが、国民はそういった形で理解したということをお願いしたので、そういうシステムを取って、できるだけそういう企業に補助するとか、県を挙げてそういう形で取り組んでいるという姿勢というか、アピールしていくのも1つ重要と思った。

【中尾座長】

- ・私も、60歳にならなきゃ入社できない会社をつくりたいという夢を持って、ちょっとうまくいかなかった。だんだんそこへ給料が右肩下がりで下がっていくが、いろいろお付き合いしていて、今は60代の経験豊かな人が大変元気。そういうことも自分ができなかったから、若い人につくってもらおうかなと思って、いろいろ話したりしている。おっしゃるとおり。

【三牧知事政策局長】

- ・今、学長から再雇用のお話をいただいたが、今年のスケジュールについては、10月にまた来年度の方針を伺うが、中間取りまとめから10か月たっているので、戦略に今はあまり入っていないが、こういう視点も考えておくというか、県庁として勉強というか、施策を考えておいたほうが良いというものが現段階であれば、簡潔に委員の皆様にご指摘いただけるとありがたい。

【中村委員】

- ・以前も話が出ていたと思うが、富山はすごい教育県だけど、やはりIT人材はますます不可欠。なので、高校生ぐらいからそういったノウハウを身につけるような支援というのは、早くやった県が勝つのではないかと思っている。

【新田知事】

- ・昨年、第2期の教育大綱というのをづくり、それに基づいて教育振興基本計画というのをリバイスした。その中に、中村委員がおっしゃる、高校あるいはもっと下からITをしっかりと取り組むということを入れており、実現、実行していくようにしている。

【藻谷委員】

- ・KPIの1つとして、富山の人には外に褒めてもらわないと分からないので、今からの計画期間中に、他県から来た人、日本人、外国人問わずに、富山もしくはおたくのこの町のここがいいねと褒められたという経験のある人の数というのを調べると、KPIとしていいのではないかと思う。
- ・褒められていることを意識していないこともあるので、褒められたことを意識してみま

せんかと。今年の夏から外国人のお客さんが戻ってくるので、ものすごく褒められる機会が増えることは確実。

- ・これは本当に各論の小さい話だが、実はウェルビーイングに深くつながっている。もしくは、ウェルビーイングと言わなくてもどこかに必ず引かかるので、どこかに入れていただけるとありがたいと思う。

【高木委員】

- ・今意識すべき点としては、インバウンドは絶対今のうちからやったほうがいいと思う。
- ・あともう一個、俯瞰した目線としては、北陸新幹線が敦賀まで延伸するといったときに、もう一回北陸という言葉が東京や都市部で結構聞かれるようになると思う。そのときに、富山でもウェルビーイングを掲げているが、福井も掲げていたり、石川も今掲げたりしているので、北陸の連携というのは、富山が、新田さんがリーダーシップを取って、どんどん北陸イコール、ウェルビーイングの地域だとしていくことは結構大事なのかなと思う。
- ・もうそういうエリアだと。北陸イコール北欧みたいなポジショニングを取っていったほうがいいと思う。人口は決して多くないけれども、ライフスタイルが先進的だったり、自然環境が豊かだったりとかしていて、そういうイメージづくりをどうやっていくのかということは、ほかの石川、福井との連携もそうだし、意識的に考えていってマーケティングしていくべきかと思う。

【藻谷委員】

- ・まさに富山がフィンランドでという感じ。

【中尾座長】

- ・時間も参りましたので、今までの意見を事務局でまたおまとめをいただきたい。

【三牧知事政策局長】

- ・進め方とKPIについて、全体もだが、それぞれのワーキングに入っている委員の皆様と各柱に整理して、また御報告させていただく。

【新田知事】

- ・ワーキンググループの進め方のこと、それから座組み、この6本の柱、2年目の実行段階としてこれでいいのかということも対応させていただきたいと思う。
- ・それからKPI、さらっと口頭でやるのではなくて、しっかり明文化する必要があるという話もごもつともだと思う。
- ・そんな中、特にウェルビーイング戦略のことが、やはり何かふわっとしているのではないかということ。これもまた一考したいと思うが、多く出たご意見は、若い女性のことを1つターゲットにするという。このあたり、ウェルビーイングは中村さんに仕切っていただいていたが、1つKPIに若い女性ターゲットというのを入れていく方向はどうか。

【中村委員】

- ・全部は、いきなりはできないと思うので、今の話で5年後に1,000万の関係人口を目指すということであれば、第1フェーズで1年目は子育て中の女性に絞る。2年目はもう少し若い女性に広げるみたいなステップができると、非常に具体的に、かつ県民の皆様にも分かりやすい施策ができるのではないかなと感じたので、ぜひそういう形でまた土肥さんとの議論も進めたいと思う。

【新田知事】

- ・まちづくりの組織づくりについても、5つと言わず15全部、それが県の務めじゃないかというご意見もぐさりと刺さった。
- ・私は2つの顔があって、役所のトップという立場と政治家の立場があるが、いわゆる公務で各市町村に行くと、やはり結構硬い。なかなか皆さん本音は言っていない。でも、政治家として政務で行くことがあると、結構皆さん好きなことをおっしゃる。
- ・この前、ある町で議員さんが言われたが、富山県でサンドボックス予算ってあるでしょと。実は昨年度から、それぞれの部局に1,000万円ずつ用途が決まっていない予算というのをつけた。これは本県では初めてのことで。みんな真面目なので無駄遣いはないが、年度途中でいろいろ出てきた課題や問題意識に基づいて、1,000万円までは部局長の判断で使っていいという予算になっている。
- ・初年度の去年、結局7割ぐらい使われ、それを本年度、また本格的な予算にしているが、

そのことをその町議の方は見ておられて、県で15市町村に1,000万円くれと、いわゆる市町村サンドボックス予算というのを付けてもらった俺たち頑張るよみたいなことがあった。

- ちょっと制度的にそれは可能かどうか分からないが、例えばそんなこととまちづくり組織、自走するような組織がうまくかみ合っていたら面白いのかなと今のお話を聞いて思った。
- 今日いただいたご意見をもう一回取りまとめまして、また今後に備えていきたいと思う。